

# 在宅障害児・者の地域における入浴支援に関する研究

## －生活スタイルと入浴の質を考慮した入浴支援のあり方の検討－

主査 野口祐子\*<sup>1</sup>委員 西村 顕\*<sup>2</sup>

障害児・者を対象としたこれまでの研究で、自宅浴室の整備の限界や介助者の負担の問題が明らかになったことから、入浴行為を自宅の中だけで完結させるのではなく、地域に拡大して捉え、安全かつ快適で質の高い入浴環境や支援のあり方を検討するため、アンケート及び訪問調査により実態把握をおこなった。その結果、親の身体的負担や仕事と介助の両立の問題に対して、施設入浴やヘルパーを利用した自宅入浴のニーズが高いことがわかった。そして、これらの利用は、親の支援だけでなく、本人の社会参加や地域での交流にもつながっていることがわかった。今後は施設入浴の回数制限の緩和など親や本人の生活スタイルにあわせた制度づくりが必要である。

キーワード：1) 肢体不自由、2) 在宅、3) 入浴、4) 住宅改造、5) 介助、  
6) 施設入浴、7) 地域支援、8) 生活スタイル、9) 入浴の質、10) 入浴の地域化

## RESEARCH REGARDING LOCAL BATHING SUPPORT FOR AT-HOME CHILDREN AND ADULT PERSONS WITH DISABILITIES

### － Examining the State of Bathing Support in Consideration of Lifestyles and Bathing Quality －

Ch. Yuko Noguchi

Mem. Akira Nishimura

Our research targeting children and adult persons with disabilities has made it clear that limitations exist for at-home bathing equipment, as do problems regarding the burden placed on caregivers. We conducted questionnaires surveys and visits to investigate the state of safe yet comfortable bathing environments and support as local issues. Results revealed high-level demand for bathing facilities, helpers and so forth in light of the physical burden on parents and the challenge of fulfilling both work and caregiver duties. We also came to understand that use of such services can lead to user participation in society, local exchanges, etc.

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

2007年12月から「障害児の育成と自立支援のための住環境整備に関する研究」（研究代表者：野口祐子）<sup>文1)</sup>において肢体不自由児の住環境整備全般について調査を実施し、2009年4月からは「障害のある子どもの成育・子育てモデルの検討と住環境整備の介入のあり方に関する研究」（研究代表者：阪東美智子）<sup>文2)</sup>において、在宅の重度肢体不自由児の入浴環境整備について研究をおこなってきた。その中で、重度の肢体不自由児の場合、入浴に関する親の要望は高く、浴室整備や福祉用具などの支援や情報が不可欠であることが分かった。しかし、調査を進める中で、住戸面積に限りがあり住宅改造や福祉用具の導入が困難で、本人も介助をする親も無理な姿勢を取って危険が伴っている事例や、その改善のためにヘルパーを導入して入浴するが、ヘルパーにも同様に身体的負担がかかっている事例に出会うことが少なくなかった。

一方、在宅障害児・者の入浴環境に関する先行研究は非常に少なく、さらに、地域における入浴サービスに関する研究については高齢者を対象とするものはあっても、障害者に関するものを見つけることはできない。

したがって、本研究では、これまで住宅内で完結させようとしてきた入浴という生活行為を地域に拡大して捉え、在宅の障害児・者やその家族、また、地域でおこなわれている入浴サービス<sup>注1)</sup>の実態について調査をおこない、入浴のニーズを明らかにするとともに、住宅改造や福祉用具の導入などの住環境整備にとどまらず、入浴

| 1 章：研究の背景と目的                          |                                          |                                                             |
|---------------------------------------|------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 2 章：<br>地域における在宅障害者の入浴実態<br>(アンケート調査) |                                          | 5 章：<br>在宅障害者の<br>浴室環境と<br>地域における入浴支援<br>(アンケート調査・<br>訪問調査) |
| 3 章：<br>在宅障害者の<br>入浴形態<br>(訪問調査)      | 4 章：<br>施設入浴サービス<br>利用者のニーズ<br>(アンケート調査) |                                                             |
| 6 章：まとめ                               |                                          |                                                             |

図 1-1 本論の構成

\*<sup>1</sup> 聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科 准教授

\*<sup>2</sup> 横浜市総合リハビリテーションセンター地域リハビリテーション部研究開発課 工学技師

を地域で支えるという視点に立って、安全かつ快適でより質の高い入浴支援のあり方を検討することとする。

## 1.2 研究の方法

本論の構成は図 1-1 の通りである。まずは地域における在宅障害者の入浴の実態を明らかにするため、東京、神奈川、埼玉の在宅障害者を対象にアンケート調査をおこなった（2 章）。その調査によって、在宅障害者が様々な入浴サービスを利用していることがわかったが、アンケートではわかりにくい個別の入浴形態を把握するため訪問調査をおこなった（3 章）。さらに、施設入浴利用者の実態とニーズを明らかにするため、施設を限定して、アンケート調査を実施した（4 章）。また、在宅障害者が浴室環境の不備によって入浴が困難となり、地域における入浴支援が必要となっている実態を把握するため、それらの問題が顕著である被災地を対象にアンケート及び訪問調査をおこなった（5 章）。なお、調査方法の詳細については各章で述べることにする。

## 2. 地域における在宅障害者の入浴実態

### 2.1 本章の目的

本章では、在宅生活をしている障害者（主に肢体不自由）を調査対象とし、入浴環境および入浴の実態などを明らかにすることを目的とする。具体的には、東京都（荒川区、北区）、神奈川県（横浜市）、埼玉県を調査対象地域とし、各地域の通所施設などを利用している障害者を対象とした。通所施設などを通してアンケート調査を実施し、入浴頻度などの現状把握および建築的な配慮や地域における入浴サービスのあり方について考察する。

### 2.2 調査概要

東京都では、荒川区と北区を調査対象地域とし、通所施設（生活実習所、福祉作業所、福祉センター、デイサービスなど）を通してアンケート調査を依頼した。神奈川県では、横浜市を調査対象地域とし、市内 17 箇所の障害者地域活動ホーム（障害者の地域生活を支援する横浜市独自の拠点施設）の利用者を対象とし、埼玉県では、主に地域活動支援センターの利用者を対象とした。アンケート項目は、基本属性（年齢、性別、身長、体重他）、身体機能（疾患、障害、移動方法、座位の状況、緊張の程度、医療的ケアの有無他）、浴室環境（住宅形態、浴室寸法、浴室ドア形状、入浴時の福祉用具他）、1 週間の入浴状況（入浴場所、方法、介助者他）、自宅での入浴状況、入浴サービスの利用状況（ヘルパー、訪問入浴、施設入浴他）、福祉用具などの情報入手などを設定した。各地域へのア

表 2-1 アンケート調査用紙配布、回収概要

|                              | 施設数 | 配布数 | 回収数            | 有効数*           |
|------------------------------|-----|-----|----------------|----------------|
| 東京都北区、荒川区<br>(福祉センター、福祉作業所等) | 10  | 236 | 167<br>(70.8%) | 77<br>(32.6%)  |
| 神奈川県横浜市<br>(障害者地域活動ホーム)      | 17  | 359 | 204<br>(56.8%) | 184<br>(51.3%) |
| 埼玉県<br>(地域活動支援センター等)         | 6   | 104 | 47<br>(45.2%)  | 45<br>(43.3%)  |
| 合計                           | 33  | 699 | 418<br>(59.8%) | 306<br>(43.8%) |

調査時期：2011 年 11 月～2012 年 1 月

※回収数より、18 歳未満の人および療育手帳のみの所有者を除外した。グループホームおよびケアホーム入居者も除外。

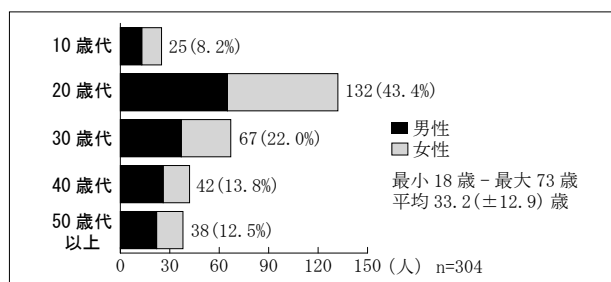


図 2-1 年齢構成と男女比

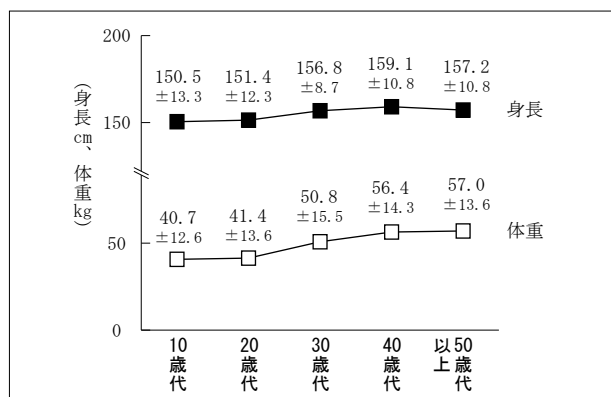


図 2-2 年齢構成別にみた身長と体重

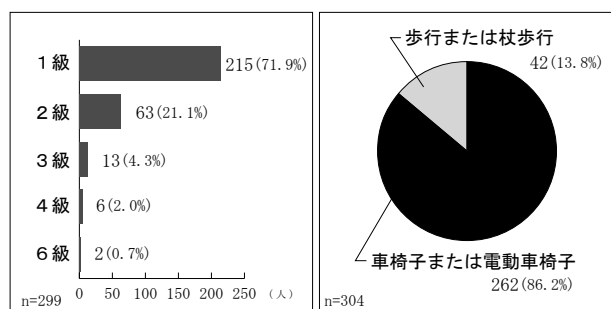


図 2-3 身体障害者手帳等級

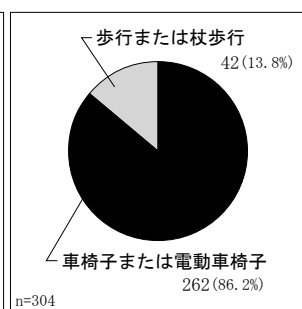


図 2-4 主な移動方法

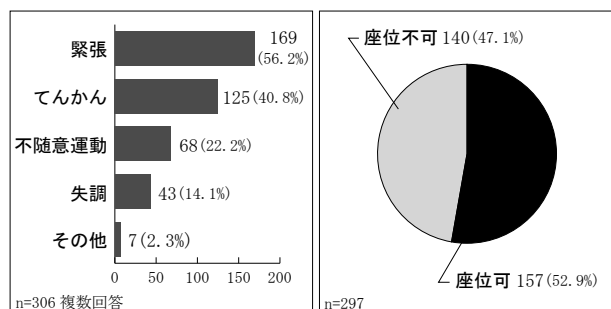


図 2-5 緊張等の症状

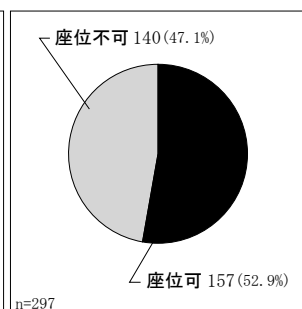


図 2-6 座位の状況

ンケート配布数および配布場所、回収数は表 2-1 の通りである。なお本調査では、通所施設を利用している身体障害者（主に肢体不自由）を主な対象者としているため、18 歳未満の対象者や知的障害者は除外した（重複障害者は対象とした）。配布数は 33 施設 699 部であり、有効回収部数は 306 部（43.8%）であった。調査期間は、2011 年 11 月から 2012 年 1 月である。

## 2.3 調査結果

回答の得られた 306 人の障害者の概要を説明する。男女比は、ほぼ 1:1 であり、平均年齢は、33.2（±12.9）歳。年齢層は 18 歳から 73 歳まで幅広く、20 歳代、30 歳代が全体の約 7 割を占めた（図 2-1）。平均身長は、154.1（±11.7）cm（最小 120.0cm，最大 182.0cm），平均体重は、47.2（±15.4）kg（最小 16.7kg，最大 100.0kg）であり、年齢構成別にその推移をみると、年代があがるにつれて体重は増える傾向にあった（図 2-2）。身体障害者手帳等級は 1 級が約 7 割を占めた（図 2-3）。また、主な移動方法は、全体の約 9 割が車椅子または電動車椅子を使用していた（図 2-4）。その他、約半数に緊張症状が見られ（図 2-5）、自力で座位がとれる人は約半数であった（図 2-6）。

### 1) 地域別にみた住宅形態と入浴環境

住宅の形態について、持家戸建住宅が 54.0%，持家共同住宅が 19.3%であり、持家率は 73.3%であった。埼玉県では持家戸建住宅の割合は 73.3%と最も高く、東京都が 48.6%と最も低かった（図 2-7）。浴室の大きさについては、大きさを約 0.75 坪以下、約 1 坪、約 1.25 坪以上の 3 つに分類し、住宅形態とクロス集計を実施した（図 2-8）。その結果、持家戸建住宅では、約 1.25 坪以上の割合が高く、共同住宅（持家、賃貸）では、約 0.75 坪以下の割合が高いことがわかった。また、障害に配慮して住宅改造など（新築や移転を含む）をしたことがある人は、全体で約 6 割にみられ、特に持家戸建住宅に居住する人の住宅改造などが約 7 割にのぼることがわかった（図 2-9）。

### 2) 身体機能からみた浴室環境

住宅改造などを実施した人の特徴をみるため、本章では、身体機能の程度を判断するのに、座位能力をひとつの基準とした。つまり、自力で座位がとれるかととれないかが、介助時の協力動作の可否にもつながるため、座位能力は介助負担や住環境に大きく影響を与える要素であると判断できるからである。

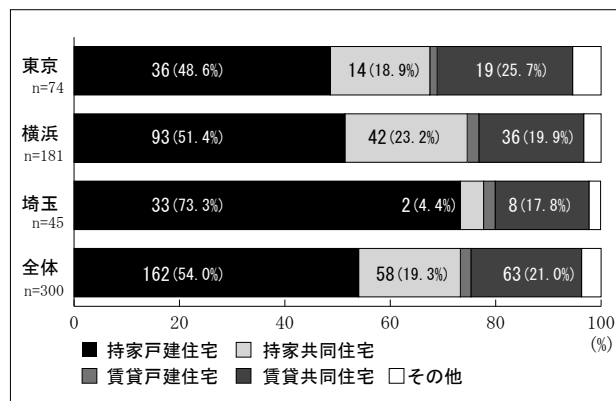


図 2-7 地域別にみた住宅の所有形態

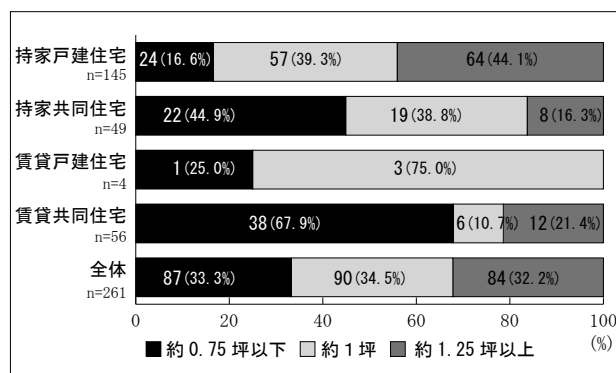


図 2-8 住宅の所有形態と浴室の大きさ

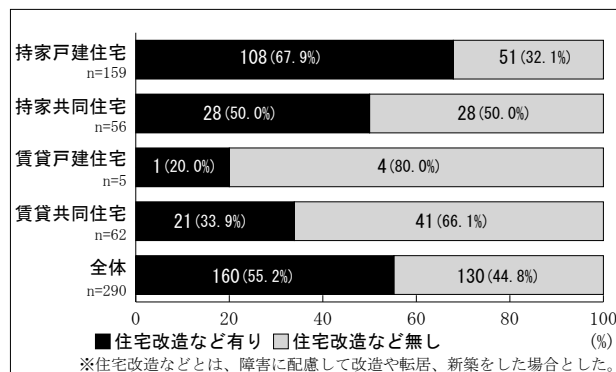


図 2-9 住宅の所有形態と改造経験

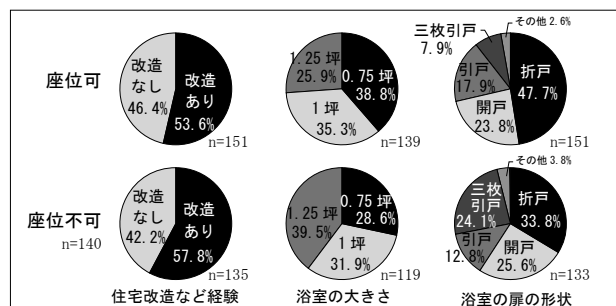


図 2-10 座位の状態と改造経験および浴室の仕様

住宅改造などの実施の有無については、座位の状況とはあまり関係なく、約 6 割が住宅改造などを実施しているのが特徴的であった。一方、浴室の大きさについては、座位のとれない人の方が広い浴室（約 1.25 坪以上）を使っていることがわかった。さらに、浴室の扉の形状についても、座位のとれない人は三枚引戸の設置割合が高かつ

た（図 2-10）。

入浴時に使っている福祉用具をみると、座位のとれる人は手すりの使用がもっとも多く、座位がとれない人は手すりよりも入浴用椅子の使用割合が高いことがわかった。また、座位のとれない人の約 2 割はリフトを利用していた（図 2-11）。

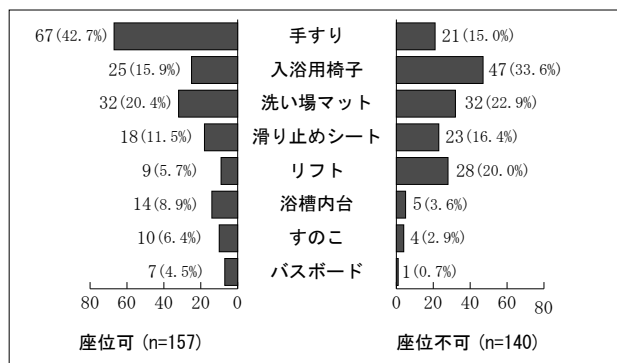


図 2-11 座位の状態と入浴時に利用している福祉用具

### 3) 入浴時の困りごと（設備面、介助面）

前項に引き続き本項でも座位の状況によって、入浴時の困りごと（設備面、介助面）の内容が異なると考えた。結果、入浴時の困りごと（設備面）については、座位がとれる人は、「特になし」が 3 割以上ともっとも多く、次いで「出入口に段差がある」「洗い場が狭い」などの順で

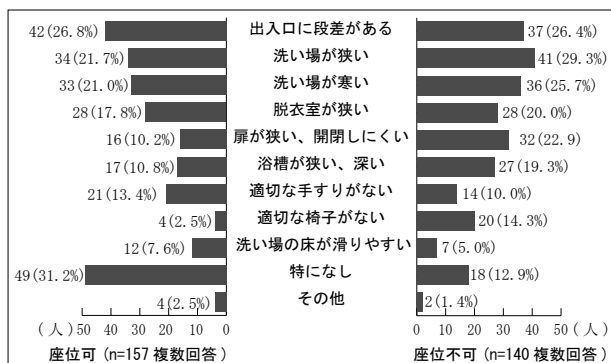


図 2-12 座位の状態と入浴時の困りごと（設備面）

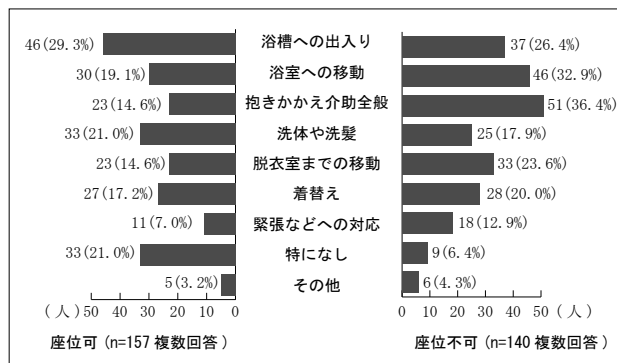


図 2-13 座位の状態と入浴時の困りごと（介助面）

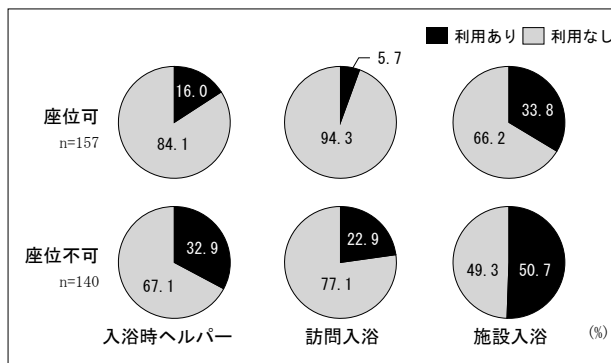


図 2-14 座位の可否と入浴サービスの利用状況

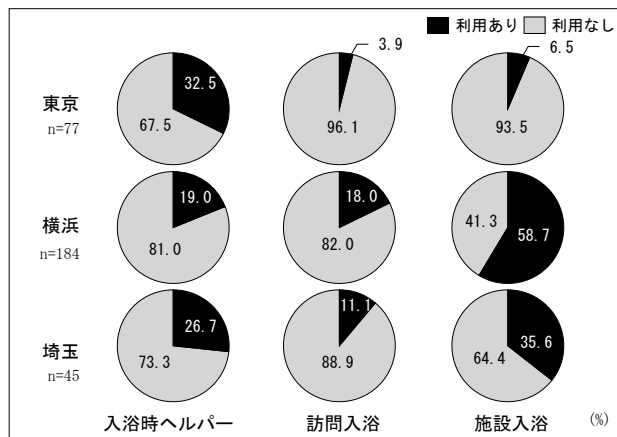


図 2-15 地域別入浴サービスの利用状況

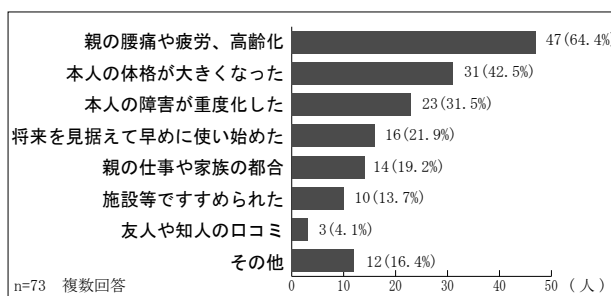


図 2-16 ヘルパー利用のきっかけ

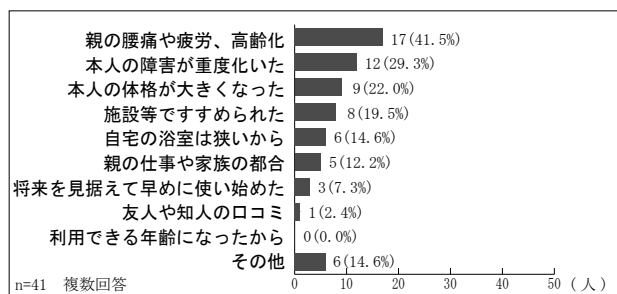


図 2-17 訪問入浴のきっかけ

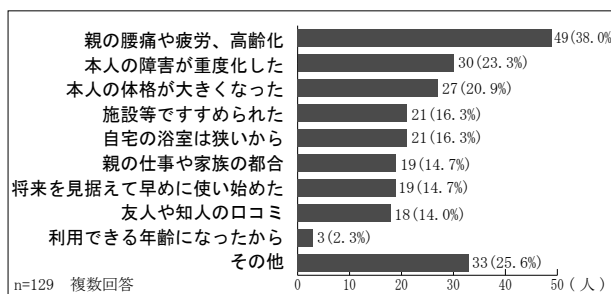


図 2-18 施設入浴のきっかけ

あった。一方、座位がとれない人の困りごとをみると、「洗い場が狭い」が約3割ともっとも多く、次いで「出入口に段差がある」「洗い場が寒い」という順であり、「特になし」という回答は少なかった（図2-12）。

また、入浴時の困りごと（介助面）では、座位がとれる人では、「浴槽への出入り」が約3割ともっとも多く、次いで「洗体や洗髪」「特になし」という項目であった。一方、座位がとれない人の入浴時の困りごと（介助面）では、「抱きかかえ介助全般」が約4割ともっとも多く、次いで「浴室への移動」「浴槽への出入り」の順であった（図2-13）。

#### 4) 入浴サービスの利用実態について

座位の状況から入浴サービスの利用状況をみると、座位がとれない人の方が、ヘルパーや訪問入浴、施設入浴を利用している割合は高いことがわかった。しかし、座位がとれない人であっても、ヘル

パーや訪問入浴の利用率は低く、ヘルパーでは約3割、訪問入浴は約2割であった。一方、施設入浴は、約半数が利用していることがわかった（図2-14）。ただし、各地域の利用状況をみると、東京では、ヘルパーの利用割合が3割以上と他の地域に比べて高く、施設入浴をみると、横浜では約6割、埼玉では約4割が利用しているなど、地域によって利用しているサービスに差があることがわかった（図2-15）。これらの入浴サービスは、地域で生活を継続していくには不可欠なサービスと考え、入浴サービスを利用している人にサービスを使い始めたきっかけについて聞いた。その結果、入浴時のヘルパー利用のきっかけについては、「親の腰痛や疲労、高齢化」が6割以上ともっとも多く、「本人の体格が大きくなった」「本人の障害が重度化した」などの理由が次いで挙げられた（図2-16）。

訪問入浴の利用のきっかけについては、ヘルパー利用と同様に、もっとも多かったのは「親の腰痛や疲労、高

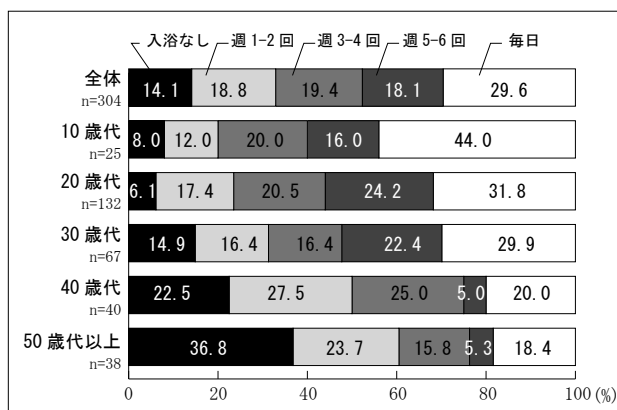


図2-19 本人の年齢と自宅入浴頻度

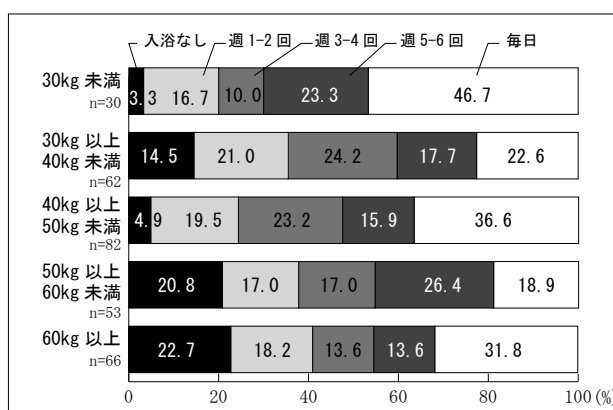


図2-20 本人の体重と自宅入浴頻度

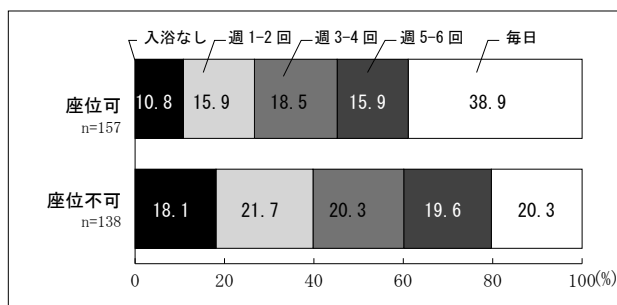


図2-21 座位の状況と自宅入浴頻度

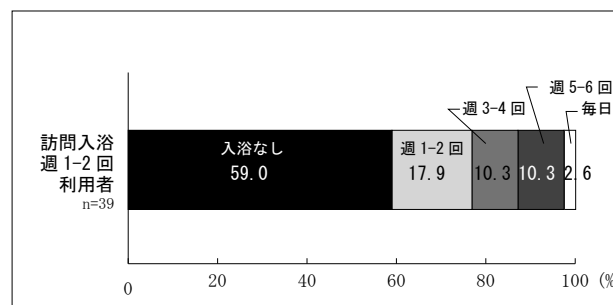


図2-22 訪問入浴の利用と自宅入浴頻度

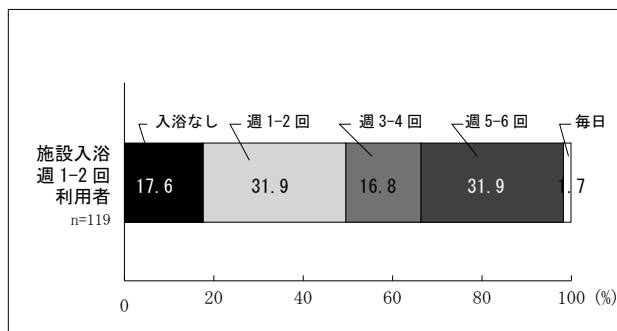


図2-23 施設入浴の利用と自宅入浴頻度

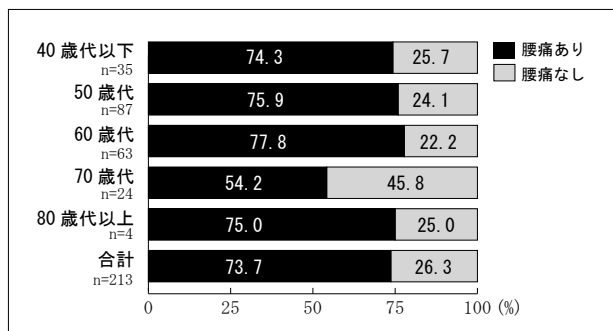


図2-24 母親の年齢と腰痛の有無

齢化」であった（図 2-17）。施設入浴の利用のきっかけについても同様に「親の腰痛や疲労，高齢化」を挙げた人がもっとも多かった（図 2-18）。施設入浴の利用のきっかけの理由に多かった「その他」では，「ショートステイを利用して，施設入浴の便利さを知った」などの回答が多かった。

#### 5) 1 週間の入浴頻度と関係する要因

在宅障害者の 1 週間の入浴頻度は，週 5 回以上の人が約半数にみられ，ほぼ毎日自宅の浴室で入浴している実態が明らかになった（図 2-19）。

在宅障害者の 1 週間の入浴頻度と関係する要因について，複数の項目でクロス集計を実施した。その結果，有意差が見られた項目は以下の通りである。

##### ①本人の年齢や体格と自宅での入浴頻度との関係：

本人の年齢があがるほど，自宅での入浴頻度は落ちていることがわかった。10 歳代では，4 割以上が毎日入浴しているのに対し，20 歳代になると約 3 割，40 歳代，50 歳代以上になると約 2 割にまで減少していた。反対に 50 歳代以上になると 1 週間のうち自宅では一度も入浴をしないという人が約 4 割にのぼった（図 2-19）。

本人の体重と入浴頻度との関係を見ると，体重 30kg 未満の場合は，約半数が毎日入浴しているが，体重が 30kg を超えると毎日入浴する頻度は 2-3 割に減っていることがわかった。また，50kg 以上になると約 2 割は自宅での入浴をしていないことがわかった（図 2-20）。

##### ②座位の状況と入浴頻度との関係：

1 週間の自宅での入浴状況と座位の可否との間に有意差が認められ，座位がとれる人は約 4 割が毎日入浴しており，座位がとれない人で毎日入浴をしている人は約 2 割であった。また，座位がとれない人の方が自宅では入浴をしないという人が約 2 割おり，座位がとれる人よりもその割合が高いことがわかった（図 2-21）。

##### ③入浴サービスと自宅での入浴頻度との関係：

訪問入浴を週 1-2 回利用している人の約 6 割は自宅の浴室では入浴していなかった（図 2-22）。また，施設入浴を週 1-2 回利用している人は，自宅でも週 5-6 回入浴する人が約 3 割いることがわかった（図 2-23）。

#### 6) 介助者の年齢構成と腰痛の有無

主な介助は母が約 8 割を占め，どの年代もおおむね 7 割程度が腰痛を患っていることがわかった（図 2-24）。

#### 7) 入浴サービスに関する親の考え方

また，理想的な入浴について，「ヘルパー」「訪問入浴」「施

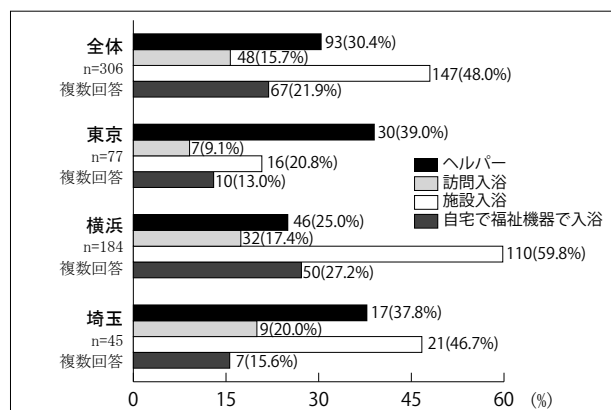


図 2-25 地域別にみた理想的な入浴サービス

設入浴」「福祉機器を使って自宅で入浴」の 4 つの選択肢を挙げ，複数回答で記入してもらった。その結果，全体では，約半数が「施設入浴」を希望しており，次いで「ヘルパー」「自宅で福祉機器を使って入浴」の順であった。地域別にみると，東京ではヘルパーを希望する割合が高く，横浜や埼玉では，施設入浴を希望する割合が高かった。特に横浜では，約 6 割が施設入浴を希望していることがわかった。さらに横浜においては，福祉機器を導入して自宅で入浴介助をしたいという希望も他の地域と比較して高いことがわかった（図 2-25）。

## 2.4 考察

### 1) 地域別にみた入浴環境について

本調査では，地域によって住宅形態や浴室の大きさなどに差が見られたが，いずれにしても持家率は高く，本人の障害に配慮して住宅改造などを実施している割合が高いことが明らかになった。さらに，利用している入浴サービスにも地域差があり，東京ではヘルパー，横浜では，施設入浴を利用している人が多かった。これは，横浜では入浴施設が整っている障害者地域活動ホームの利用者を対象としてアンケート調査をおこなったこと，また，東京都北区，荒川区では，入浴施設が非常に少ないことによるところが大きい。いずれにしても居住する自治体の制度やサービスの内容によって，障害者の生活は左右されることがわかった。

### 2) 障害の重さからみた入浴環境について

自宅で家族による入浴介助を毎日おこなっている割合が全体の約 3 割を占め，週 5-6 回の入浴を含めると約半数がほぼ毎日自宅で入浴しているという現状を把握することができた。また，週 5-6 回の入浴頻度の人の多くは，週 1-2 回は施設入浴や訪問入浴を利用して週 7 回の入浴を確保していることがわかった。

一方，本人の加齢や体格が大きくなるにつれて自宅で

家族介助による入浴頻度は減ってきていた。また、障害が重い（座位がとれない）程、入浴頻度は少なくなっていたものの、住宅改造などをおこなっている割合は高く、家族で介助しやすい浴室環境にしていることもうかがえた。自由意見にもみられたが、多くの親は、高齢者のデイサービスのよう、通所先で入浴も終えて、自宅に戻ってきてほしいと望んでいるが、多くの施設では、施設入浴のサービスを週 1-2 回と制限していることが多く、その回数では足りないため、親が自宅で入浴をおこなっていると思われる。衛生面の確保やおむつかぶれなどへの対応のため、季節にもよるがほぼ毎日入浴をしたいのは、障害の有無にかかわらず、誰もが思う要望だと考える。

## 2.5 小括

在宅で生活する障害者（主に肢体不自由）の入浴について、東京、横浜、埼玉の通所施設利用者の実態を把握することができた。その結果、以下のことがあきらかになった。

- ・自宅の浴室で家族が入浴介助をおこなっている割合が高い。約半数はほぼ毎日入浴をしている。
- ・自宅を改造して浴室環境を改善している割合が高い。改造内容や使用している福祉用具は障害の程度（座位の状態）によって異なる。
- ・入浴の地域化のニーズは高い。施設入浴を週 1-2 回利用している場合でも、自宅の浴室で入浴介助をしている割合は 8 割以上であり、施設入浴の利用回数の拡大等の希望が多い。

地域によって入浴のニーズは異なっていたが、ヘルパーや施設入浴のニーズが高いことから、今後の在宅生活を継続していくには、入浴の地域化は必須であると言える。一方で、通所施設側は、日中活動を重視するために時間とスタッフが割かれる入浴サービスは週 1-2 回を限度としているところが多かった。ヘルパーや訪問入浴の利用についても、自宅に他人を入れたくないという考え方や、

利用時間などに制限があるため、十分な利用体制が整っているとは言い難い。入浴の地域化については、積極的に推進するべきであると考えているが、一方で、制度面や実施場所、利用のしやすさ、スタッフの質などのさまざまな条件の整備を同時に満たさなければならないと考える。

## 3. 在宅障害者の入浴形態

### 3.1 調査概要

前章のアンケート調査によって、1 週間の入浴状況を把握することができた。その状況は、浴室にリフトを導入し家族の介助で自宅入浴をおこなうケースのほか、ヘルパーを利用した自宅入浴や訪問入浴、施設入浴サービスを導入したり、また、それらを組み合わせて 1 週間の入浴スケジュールを組み立てているケースなど、多様な入浴方法がとられていた。それらの詳細についてはアンケート調査では把握することが困難であったため、①リフトを使って自宅入浴しているケース、②訪問入浴を導入しているケース、③施設入浴を導入しているケース、④ヘルパーを利用して自宅入浴しているケース、及びその組み合わせで 1 週間の入浴を組み立てているケースなど 6 例を選び、自宅を訪問してヒアリングをおこない、写真撮影や平面図の記録などにより住環境の把握をおこなった（表 3-1）。調査の内容は次の通りである。①本人の身体状況・ADL（日常生活動作）、②介助の状況、③住環境の状況（浴室及び全体の写真、図面）、④ 1 週間の入浴状況、⑤日中活動など生活状況、⑥将来に向けての考えなど。調査期間は、2012 年 2 月及び 10 月である。

### 3.2 調査結果

6 事例はいずれも 20-30 歳代で、身体障害と知的障害が重複しており、日常生活動作では全介助が必要な状況であった。各事例について、下記に概説する。

【事例 1】新築時に居室とトイレ、浴室間に天井走行リフトを導入した。居室、浴室の動線とリフトの設置、及び

表 3-1 事例の概要

| No. | 年齢   | 性別 | 障害    | 手帳等級           | 身長    | 体重   | 浴室大きさ    | 入浴回数：場所<br>(回)                          | 日中活動：事業<br>(回)          | 自宅入浴時の<br>家族介助の状況    |
|-----|------|----|-------|----------------|-------|------|----------|-----------------------------------------|-------------------------|----------------------|
| 1   | 29 歳 | 女  | 脳性マヒ  | 身：1 級<br>知：3 度 | 138cm | 53kg | 1.25 坪以上 | 週 5：自宅（母）                               | 週 5：生活介護                | 母が天井走行式リフトで居室から介助    |
| 2   | 22 歳 | 男  | 無酸素脳症 | 身：1 級<br>知：-   | 145cm | 31kg | 1.25 坪以上 | 週 1：自宅（両親）<br>週 2：訪問入浴<br>週 2：施設入浴      | 週 5：生活介護                | 母は腰痛で単独では入浴が困難。      |
| 3   | 24 歳 | 女  | 脳性マヒ  | 身：1 級<br>知：A 度 | 151cm | 40kg | 1 坪      | 週 1：自宅（ヘルパー）<br>週 1：施設入浴<br>週 1：ショートステイ | 週 5：生活介護<br>週 2：ショートステイ | 母は関節疾患があり、ヘルパー利用。    |
| 4   | 34 歳 | 男  | 脳性マヒ  | 身：1 級<br>知：3 度 | 147cm | 43kg | 1 坪      | 週 1：自宅（父）<br>週 3：施設入浴                   | 週 3：地活センター<br>週 3：作業所   | 父腰痛あり。父の介助に抵抗することあり。 |
| 5   | 22 歳 | 男  | 脳挫傷   | 身：1 級<br>知：-   | 178cm | 54kg | 1 坪      | 週 5：自宅（ヘルパー）                            | 週 5：生活介護                | 男性ヘルパー 1 名による介助で入浴。  |
| 6   | 20 歳 | 男  | 脳性マヒ  | 身：1 級<br>知：-   | 164cm | 33kg | 1.25 坪   | 週 4：自宅（母・ヘルパー）<br>週 1：施設入浴              | 週 5：生活介護                | 天井走行式リフトで入浴。         |

浴室の広さ確保により、母一人の介助で、家庭のペースにあわせ無理なく入浴できている。

【事例2】母の腰痛と父の仕事の都合で、入浴介助が困難となり、訪問入浴を導入した。医療的ケアが必要なため、ヘルパーを利用した入浴は認められなかった。地域活動



写真 3-1 事例 6 の入浴場面

ホーム 2 カ所での入浴、週末の父の介助による自宅入浴を組み合わせ、入浴回数を確保している。入浴すると睡眠と便通に効果があるため、入浴を重視している。

【事例3】母には関節疾患があり、入浴介助は困難であるため、ヘルパーによる入浴、施設入浴、ショートステイ 2 泊 3 日の間の入浴で、計 3 回入浴している。施設入浴は週 1 回の限度があり、ヘルパーの利用は母のストレスになるため、毎週末のショートステイにおける入浴をあわせて、現在の入浴回数を確保している。

【事例4】父の腰痛をきっかけに地域活動支援センターの入浴サービスを利用した。利用回数に限度はないが、本人が望む作業所への通所が減ってしまうためこれ以上増やすつもりはなく、また、父の介助による入浴はいやがって抵抗するため、現在の週 4 回の入浴で落ち着いている。

【事例5】身長が 178cm と大柄で、母ひとりの介助で入浴は困難であるため、ヘルパーを導入して週 5-6 回の入浴を確保している。賃貸住宅であることや、伝い歩きがなんとかできる身体機能であるため、リフトの設置はこなわず、入浴用椅子と手すりで入浴をおこなっている。

【事例6】週 5 回ヘルパー 2 人による入浴、週 1 回は通所施設を利用して入浴をおこなっていた。さらに、浴室は 1.25 坪と広く、リフトが完備されている。本人の人間関係を広げるため、3 カ所のヘルパー事業所と契約し、さまざまなヘルパーが介助にかかわっていた。また、母は本人の身体状況やスキンシップの一環として、母とヘルパーの 2 人で週 1-2 回は入浴介助をおこなっていた(写真 3-1)。

以上のように、動線やリフトの設置など物理的な環境整備で介助負担を軽減し、家庭のペースにあわせて入浴をおこなっているケースがある一方で、介助者の腰痛などの事情により、訪問入浴、施設入浴、ヘルパーによる入浴を導入しているケースがあった。それらのサービスを利用しているケースは、多くが制度を最大限に利用し、サービスを組み合わせて入浴回数を確保していた。リフ

トを利用する事例 1 も、母の病気時の対応には不安を感じており、非常時にはそれらの入浴サービスを組み合わせ入浴の質を確保することが重要である。

## 4. 施設入浴サービス利用者のニーズ

### 4.1 調査概要

東京都荒川区で、障害者に対する入浴サービスをおこなっている 2 つの障害者施設の利用者に対し、表 4-1 のようなアンケート調査を実施した。計 25 人に調査票を配布し、15 人から回答を得た。A 施設は独自の事業として回数に限度を設けず、利用者から実費を徴収して入浴サービスを実施しており、また、B 施設は 2012 年に開所したばかりであるが、区の事業として週 2 回を限度に入浴サービスをおこなっている。

表 4-1 施設入浴サービス利用者に対するアンケート調査概要

#### 【対象者】

東京都荒川区で施設入浴サービスを行っている 2 施設の施設入浴サービス利用者

A 施設：回答 12 人／配布 15 人

B 施設：回答 3 人／配布 10 人

【期間】2012 年 9 月～10 月

【方法】施設から利用者へ配布および回収。一部郵送。

#### 【内容】

1 週間の入浴状況について

本人の属性について：年齢／性別／身長／体重／障害名／障害者手帳の種類と障害等級／移動方法／座位の状況／主な介助者

住宅について：形態／浴室の広さ・段差の有無／

改造の有無と助成金の利用

入浴サービスについて：利用したきっかけ／利用して良かった点／

改善点・要望／その他のサービス利用状況

### 4.2 調査結果

施設入浴サービス利用者の状況は表 4-2 の通りである。No. 1-12 は A 施設の利用者、No. 13-15 は B 施設の利用者である。

A 施設、B 施設の利用者 15 人は、男性 5 人、女性 10 人と女性が多く、年齢は 10 歳代 3 人、20 歳代 10 人、30 歳代 1 人、80 歳代 1 人と 20 歳代が中心であった。身長は、120 cm 台 1 人、130 cm 台 2 人、140 cm 台 2 人、150 cm 台 2 人、160 cm 台 7 人、体重は 20 kg 台 1 人、30 kg 台 2 人、40 kg 台 6 人、50 kg 台 2 人、60 kg 台 3 人、70 kg 台 1 人であった。障害の種別は身体障害(肢体不自由)のみの人が 4 人、身体障害と知的障害が重複している人が 7 人、知的障害のみの人が 4 人で、いずれも重度の障害であった。自力で座位がとれない最重度の人は 4 人であった。主な介助者は、母である場合が 8 人、父 1 人、両親 2 人、ヘルパー 3 人、妻 1 人、なし 1 人であった(複数回答が 1 人あった)。

住宅の形態は、持家戸建住宅 7 人、持家共同住宅 3 人、賃貸共同住宅 5 人であった。浴室の広さは、0.75 坪 7 人、1 坪 1 人、1.25 坪 5 人、それ以上 2 人であった。浴室の



表 4-2 施設入浴サービス利用者の状況

| No. | 年齢   | 性別 | 身長<br>体重      | 身障手帳<br>療育手帳 | 座位 | 移動方法          | 主な<br>介助者             | 住宅形態       | 浴室<br>広さ<br>(坪) | 浴室<br>段差 | 入浴サー<br>ビス<br>回数(回) | その他の入浴回数                               |                               |     |     | 利用の<br>きっかけ※           |
|-----|------|----|---------------|--------------|----|---------------|-----------------------|------------|-----------------|----------|---------------------|----------------------------------------|-------------------------------|-----|-----|------------------------|
|     |      |    |               |              |    |               |                       |            |                 |          |                     | 自宅浴槽<br>(介)                            | 自宅シャ<br>ワー<br>(介)             | 他施設 | 入浴無 |                        |
| 1   | 28 歳 | 女  | 160cm<br>63kg | 2 級<br>2 度   | 可  | 歩行介助          | ヘルパ <sup>+</sup>      | 持家<br>共同住宅 | 1.25            | 有        | 週 7                 | —                                      | —                             | —   | —   | 仕事                     |
| 2   | 20 歳 | 女  | 145cm<br>45kg | 1 級<br>—     | 不可 | 電動車椅子<br>自立   | ヘルパ <sup>+</sup>      | 賃貸<br>共同住宅 | 1               | 有        | 週 7                 | —                                      | —                             | —   | —   | 仕事, 疲労<br>狭さ, 成長<br>将来 |
| 3   | 17 歳 | 女  | 138cm<br>40kg | —<br>2 度     | 可  | 歩行自立          | なし                    | 賃貸<br>共同住宅 | 0.75            | 有        | 週 5                 | 週 1・母<br>週 1・父                         | —                             | —   | —   | 仕事                     |
| 4   | 12 歳 | 男  | 120cm<br>21kg | 1 級<br>—     | 不可 | 車椅子<br>介助     | 母                     | 持家<br>共同住宅 | 0.75            | —        | 週 5                 | 週 2・父                                  | —                             | —   | —   | 疲労, 狭さ                 |
| 5   | 27 歳 | 女  | 150cm<br>51kg | —<br>2 度     | 可  | 歩行自立          | 母                     | 持家<br>戸建住宅 | 0.75            | 有        | 週 4                 | 週 3・母                                  | —                             | —   | —   | 仕事, 疲労                 |
| 6   | 35 歳 | 女  | 165cm<br>77kg | 1 級<br>—     | 可  | 車椅子介助<br>杖自立  | 父<br>ヘルパ <sup>+</sup> | 持家<br>戸建住宅 | 0.75            | 有        | 週 4                 | —                                      | —                             | —   | 週 3 | 仕事, 疲労                 |
| 7   | 29 歳 | 女  | 160cm<br>50kg | 1 級<br>2 度   | 可  | 車椅子介助<br>歩行介助 | 母                     | 持家<br>共同住宅 | 3               | 有        | 週 3                 | —                                      | 週 3・母<br>週 1・ヘルパ <sup>+</sup> | —   | —   | 仕事, 疲労<br>狭さ           |
| 8   | 27 歳 | 女  | 140cm<br>45kg | —<br>2 度     | 可  | 歩行自立          | 母                     | 賃貸<br>共同住宅 | 0.75            | —        | 週 2                 | 週 2・母                                  | —                             | 週 1 | 週 2 | 将来                     |
| 9   | 21 歳 | 男  | 169cm<br>40kg | —<br>1 度     | 可  | 歩行自立          | 両親                    | 持家<br>戸建住宅 | 0.75            | 有        | 週 2                 | 週 5・父                                  | —                             | —   | —   | 仕事                     |
| 10  | 22 歳 | 女  | 160cm<br>31kg | 1 級<br>1 度   | 不可 | 車椅子介助         | 母                     | 賃貸<br>共同住宅 | 1.25            | 有        | 週 1                 | 週 4・両親                                 | 週 2・両親                        | —   | —   | 仕事, 疲労                 |
| 11  | 29 歳 | 女  | 135cm<br>40kg | 1 級<br>2 度   | 可  | 車椅子介助<br>歩行自立 | 母                     | 持家<br>戸建住宅 | 1.25            | 無        | 週 1                 | 週 4・父<br>週 2・母                         | —                             | —   | —   | 仕事                     |
| 12  | 21 歳 | 女  | 130cm<br>30kg | 1 級<br>1 度   | 不可 | 車椅子介助         | 母                     | 持家<br>戸建住宅 | 1.25            | 無        | 月 1-2               | 週 5・父<br>週 1・ヘルパ <sup>+</sup>          | —                             | —   | —   | 仕事, 成長<br>将来, 推薦       |
| 13  | 19 歳 | 男  | 167cm<br>42kg | 1 級<br>1 度   | 可  | 車椅子介助<br>歩行介助 | 母                     | 賃貸<br>共同住宅 | 0.75            | 有        | 週 2                 | 週 2・父<br>週 1・ヘルパ <sup>+</sup><br>週 1・母 | —                             | 週 1 | —   | 仕事, 疲労<br>将来, 推薦       |
| 14  | 81 歳 | 男  | 150cm<br>60kg | 2 級<br>—     | 可  | 車椅子介助<br>杖歩行  | 妻                     | 持家<br>戸建住宅 | 0.75            | 有        | 週 2                 | —                                      | —                             | —   | 週 5 | その他                    |
| 15  | 27 歳 | 男  | 162cm<br>64kg | 1 級<br>2 度   | 可  | 車椅子介助         | 両親                    | 持家<br>戸建住宅 | 2               | 無        | 週 1                 | 週 6・ヘルパ <sup>+</sup>                   | —                             | —   | —   | 将来                     |

※「仕事」は「親の仕事や家族の都合」,「疲労」は「親の腰痛や疲労, 高齢化」,「狭さ」は「自宅の浴室は狭いから」,「将来」は「将来を見据えて早めに使い始めた」,「成長」は「本人の体格が大きくなった」,「推薦」は「役所, 学校, 病院, 施設等ですすめられた」を示す。

段差については, あり 10 人, なし 3 人, 不明 2 人であった。施設入浴サービスの利用回数は, 週 7 回 2 人, 5 回 2 人, 4 回 2 人, 3 回 1 人, 2 回 4 人, 1 回 3 人, 月 1, 2 回 1 人と様々であった。施設入浴サービス以外の日は, 両親のどちらか, あるいは両親の介助により自宅の浴槽で入浴しているケースが多かった。施設入浴サービスを利用したきっかけは, 「親の仕事の都合」が最も多く 11 人, 次いで「親の腰痛, 疲労, 高齢化」7 人, 「浴室が狭いから」3 人, 「将来を見据えて早めに使い始めた」3 人, 「本人の体格が大きくなった」2 人, 「役所, 学校, 病院, 施設などですすめられた」2 人であった。入浴サービスを利用してよかった点を自由記述で聞いたところ, 親からの回答が大半であるが, 主な内容として「仕事と介助の両立でいっぱいだったが時間的に楽になった」, 「体力的に楽になった」, 「帰宅してすぐ寝られる」など, 仕事をする親が時間的にゆとりを持つことができたケース, また, 「親と本人の両方の身体を洗わなくて済むので疲れなくなった」, 「親の体調が悪いと入浴できなかった」など, 親の疲れや体調不良など身体的な負担軽減につながったケース, また, 「自宅より広いお風呂でゆっくり入れる」, 「緊張で手足が動いてもぶつけなくなった」など, 浴室の広さによって安全で快適に入浴できたケース, 「本人がご機嫌で帰ってく

る」, 「よく眠れる」という本人のストレス軽減につながったケースなどが複数見られた。また, 入浴サービスそのものの以外のメリットについて, 本人は, 施設のスタッフあるいは別の利用者など親以外の人と交流することが気分転換になり, 楽しいと感じていることがわかった。また, 交流することで情報を得ているという意見も多かった。

#### 4.3 考察

以上の結果から, 施設入浴サービスの利用者は, 年齢は 20 歳代が中心で, 本人には重度の障害があり, 8 割が体重 40 kg 以上で, 約半数が身長 160 cm 台であるが, 母が主な介助者である場合が多く, 介助の負担が大きいことが把握できた。さらに, 「利用のきっかけ」などから, 親は働き盛りで, 介助と仕事の両立には時間的にも身体的にも負担が大きいことがわかった。一方, 共同住宅に居住する人が約半数であり, 浴室の広さが 0.75 坪の事例も約半数であったため都市型の住宅事情がうかがえ, 狭い浴室での入浴は介助者にも本人にも身体的負担が大きいことがわかった。そして, 施設入浴サービスは, 心身ともに疲労する親にとっての負担軽減やレスパイトになる一方, 本人にとっては生活のメリハリとなり, 社会参加, 交流による楽しみを生み出していることもわかった。

以上のことから、本人の生活スタイルだけでなく、介助と仕事を両立させる親の生活スタイルにも対応できる施設入浴サービスがますます必要になってくるものと思われる。

## 5. 在宅障害者の浴室環境と地域における入浴支援

### 5.1 調査概要

#### 1) 調査目的

2011年3月11日に起こった東日本大震災のために建設された応急仮設住宅は、建設当初、防寒対策やバリアフリー対策が十分でなかったが、順次追加工事により改善がなされた。バリアフリー対策としては、砂利敷きの通路の舗装がおこなわれたほか、希望者に対して玄関の手すりやスロープの設置などがおこなわれたが、浴室については、建設費用や工期重視のためにユニットバスの出入口の段差や狭さの問題が残った。仮設住宅の浴室がスペースや段差の問題で高齢者や障害者が使用しにくい点については、厚生労働省がおこなった「応急仮設住宅の居住環境などに関するアンケート調査」<sup>文3)</sup>の結果でも明らかになっている。このアンケート調査でも把握されたように、仮設住宅で入浴が困難になっている問題に対して、高齢者は介護保険のデイサービスで入浴をすることができる。岩手、宮城、福島の3県42市町村に対しておこなった朝日新聞の調査では、2011年4月から2012年1月までの介護保険認定者が前年同期と比較して2割

増加したことがわかった。被災市町村の声の中には、仮設住宅の浴槽の縁が高く入浴が困難となってデイサービスで入浴する軽度者が増えたとの報告もある<sup>文4)</sup>。

そこで、ここでは、浴室環境の不備や整備の限界から入浴が困難な障害者の状況を把握すること、そして、被災によりサービスも不足している状況から、地域がどのように障害者の入浴を支援していけるかを検討することにより、基礎データの構築に役立つ知見を得ることを目的とする。

#### 2) 調査方法

2012年2月から4月にかけて、岩手県沿岸南部の仮設住宅に入居する障害者19人にアンケート調査をおこない、18人から有効な回答を得た。さらに、訪問の許可が得られた人のうちNo.1-9に対し訪問調査をおこなった。アンケート調査の内容は表5-1、調査事例の概要と得られた回答は表5-2の通りである。18人の内訳は、男11人、女7人、65歳以上は9人で、要介護認定を受けている人は6人であった。身体障害者手帳所持者は17人で、等級は1級～4級、肢体不自由者は12人でいずれも下肢に障害があった。また、視覚障害者が3人、内部障害者が2人、内部と視覚の重複障害者が1人であった。この18人のうち、No.1-7は障害者用仮設住宅に入居しており、No.8-18は一般の仮設住宅に入居していた。障害者用仮設住宅における主なバリアフリー対策は、アプローチにスロープ（勾配1/12）、各住戸の玄関及び居室の出入口は引戸、車椅子対応の台所、トイレの出入口はカーテン、浴室・トイレに手すり設置などである。一方、浴室については、大きさは1116サイズで出入口に約25cmの段差があり、一般の仮設住宅の浴室と大きな違いはない（写真5-1）。この障害者用仮設住宅は岩手県に2棟が建設されたが、1棟は5戸＋談話室の構成となっており、調査時は2棟あ

表5-1 仮設住宅に対するアンケート調査の概要

- ・基本的属性（年齢、性別、移動方法、障害名、身体障害者手帳等級、要介護度）
- ・最近1週間の入浴状況
  - 月曜日から日曜日までの入浴場所・方法、及び入浴時の介助者
- 1. 仮設住宅の浴室（湯船に入る、または、シャワー・かけ湯を選択）、2. 施設で入浴、3. 入浴しない
- ・仮設住宅の浴室での入浴時の危険
- ・仮設以外で入浴している場合の移動手段
- ・震災前と震災後の入浴方法と回数の変化、その理由
- ・仮設住宅の問題点、改善してほしいこと

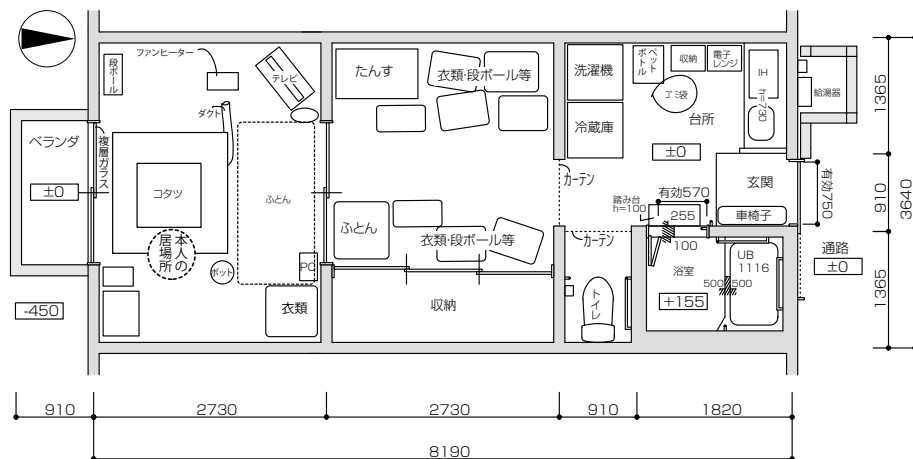


図5-1 仮設住宅の住戸平面と家具配置（事例7）



写真5-1 仮設住宅の浴室の段差（事例7）

表 5-2 アンケート調査を行った事例の概要と浴室利用回数、震災前後の変化、入浴時の危険

| No. | 性別 | 年齢   | 身障手帳 | 要介護度  | 障害<br>原因疾患        | 屋外移動時<br>補装具 | 浴室利用<br>回数（回） | 震災前後の変化                       | 入浴時に経験した危険              |
|-----|----|------|------|-------|-------------------|--------------|---------------|-------------------------------|-------------------------|
| 1   | 女  | 68 歳 | 2 級  | 要介護 2 | 肢体不自由<br>関節リウマチ   | 杖            | 週 0           | 自宅（浴槽）：週 4→<br>親戚宅：週 2        | -                       |
| 2   | 男  | 50 歳 | 4 級  | -     | 内部障害<br>陳旧性肺炎性変化  | -            | 週 7           | 変化なし                          | 浴槽内で滑った。                |
| 3   | 男  | 51 歳 | 2 級  | -     | 肢体不自由<br>脳性マヒ     | 杖            | 週 4           | 変化なし                          | -                       |
| 4   | 男  | 51 歳 | 2 級  | -     | 肢体不自由<br>小児マヒ     | 杖・車椅子        | 週 7           | 変化なし                          | 松葉杖が滑った。                |
| 5   | 男  | 74 歳 | 1 級  | 要介護 2 | 肢体不自由<br>脊髄損傷     | 車椅子          | 週 0           | 自宅（浴槽）：週 4→<br>施設：週 2         | -                       |
| 6   | 男  | 67 歳 | 2 級  | 要介護 2 | 肢体不自由<br>脳梗塞      | 車椅子          | 週 0           | 変化なし（施設週 1）                   | -                       |
| 7   | 女  | 68 歳 | 2 級  | 要支援 2 | 肢体不自由<br>髄膜炎・脳梗塞  | 車椅子          | 週 4（かけ湯）      | 自宅（浴槽）：週 4→<br>かけ湯：週 4        | 手足をぶつけた。                |
| 8   | 男  | 69 歳 | 1 級  | 要支援 2 | 肢体不自由<br>小児マヒ     | 車椅子          | 週 0           | 自宅（浴槽）：週 3→<br>施設：週 3         | -                       |
| 9   | 女  | 64 歳 | 3 級  | -     | 肢体不自由<br>くる病      | 杖            | 週 7           | 変化なし                          | -                       |
| 10  | 女  | 70 歳 | 1 級  | -     | 視覚障害              | -            | 週 4           | 自宅（浴槽）：週 7→<br>仮設（浴槽）：週 4     | 洗面台にぶつかった。              |
| 11  | 男  | 11 歳 | 1 級  | -     | 肢体不自由<br>ダウン症     | -            | 週 7           | 変化なし                          | -                       |
| 12  | 女  | 56 歳 | 2 級  | -     | 肢体不自由<br>筋ジストロフィー | -            | 週 3-4         | 変化なし                          | -                       |
| 13  | 男  | 64 歳 | 2 級  | -     | 視覚障害              | 白杖           | 週 2（シャワー）     | 自宅（浴槽）：週 2→<br>仮設（シャワー）：週 2   | 浴槽を出る時滑った。              |
| 14  | 男  | 83 歳 | -    | 要介護 4 | 肢体不自由<br>脳梗塞      | 車椅子          | 週 0           | 自宅（浴槽）：週 7→<br>施設：週 2         | -                       |
| 15  | 男  | 66 歳 | 3 級  | -     | 肢体不自由<br>後縦じん帯骨化症 | 杖            | 週 7（シャワー）     | 自宅（シャワー）：週 2→<br>仮設（シャワー）：週 7 | 浴槽縁に引っかかった。             |
| 16  | 女  | 70 歳 | 1 級  | -     | 内部障害<br>慢性腎不全     | -            | 週 4           | 自宅（浴槽）：週 7→<br>仮設（浴槽）：週 4     | -                       |
| 17  | 女  | 64 歳 | 3 級  | -     | 視覚障害              | 歩行車          | 週 3-4         | 変化なし                          | 浴室床で滑った。<br>洗面台に頭をぶつけた。 |
| 18  | 男  | 61 歳 | 1 級  | -     | 内部・視覚障害<br>慢性腎不全  | -            | 週 4           | 変化なし                          | 洗面台にぶつかった。              |

わせて 8 戸の入居があった。図 5-1 は事例 7 の住戸平面と家具配置の状況である。

## 5.2 調査結果

アンケート調査で得られた仮設住宅での入浴回数、震災前後の入浴の変化、仮設住宅の浴室での入浴時の危険については表 5-2 に示す。

### 1) 浴室利用回数

18 人のうち仮設住宅の浴室で入浴しているのは、週 7 回（毎日）が 5 人、週 2～4 回が 8 人、入浴できない（週 0 回）が 5 人であった。仮設住宅の浴室で入浴できない 5 人は、脊髄損傷、脳梗塞、小児マヒ、関節リウマチによって重度な下肢障害がある入居者であった。約 25cm の浴室の出入口の段差を乗り越えることが困難であり、シャワー浴をおこなうことも難しい状況であった。

### 2) 震災前後の入浴方法の変化

震災前後の入浴の変化について、仮設住宅に入居して入浴回数や方法が変化した人は 9 人、変化しなかった人が 9 人であった。変化した 9 人のうち 4 人は、かつては自宅の浴槽で入浴をしていたが、現在の仮設住宅では入浴できず、介護保険のデイサービスなどを利用して入浴したり、親戚宅の浴室を借りて入浴していることがわかった。また、変化した 9 人のうち 4 人は、仮設住宅で入浴しているものの、2 人が入浴回数が減り、2 人が浴槽入浴からシャワー浴に方法を変えるなど、入浴の質は低下が

見られた。しかし、1 人（No. 15）については、以前自宅浴室で週 2 回シャワー浴をおこなっていたが、現在は週 7 回シャワー浴をおこなっており、入浴の質は向上していた。以前の浴室より狭いため、手が届く範囲にものがあるって使いやすいとの意見であった。

### 3) 入浴時の危険

仮設住宅の浴室で入浴している 13 人のうち 8 人が、「滑った」「ぶつけた」などを経験していた。主に「浴室の出入り、浴槽の出入りなど段差を超える際に滑った」、「浴室が狭くて手足をぶつけた」、「浴槽上部に張り出している洗面台に頭をぶつけた」というもので、段差や狭さという物理的な環境が原因となる事故であった。特に「洗面台に頭をぶつけた」という 3 人はいずれも視覚障害者であった。

## 5.3 地域における入浴支援の動向

被災地では、既存の介護保険制度によるデイサービスを使って入浴を補う方法のほかにも入浴を支援しようとする動きがあるが、現実的には課題も多い。たとえば、障害者用仮設住宅では、談話室を改造し、広めの浴室を作るという提案が、2012 年 2 月に市からあった。入居から半年が経過し、入居者の入浴のスタイルは定まってきており、さらに談話室は入居者同士の交流を図るために有効に使われていたため、談話室をなくす提案には反対の意向を伝えたという。また、50 戸以上の仮設団地に設置されている集会所には広めの浴室が作られているが、

それを運用する人員体制がなく、物置や支援員の休憩所になっているなど、集会所に設置された浴室が活用されている例は同市内ではなかった。

#### 5.4 考察

今回の調査により、自宅の浴室環境が障害者の生活に大きく影響を及ぼし、特に下肢に重度の障害がある人は環境の未整備で入浴できなくなっている実態を把握することができた。一方、高齢者の場合は、介護保険を利用し、地域に施設があればデイサービスなどを利用して入浴を補っている状況も把握できた。仮設住宅の浴室は狭く、改造には限界があるため、住宅内で入浴の問題を解決するのではなく、地域で入浴を支援していく方向が求められる。現状では、高齢者の場合はデイサービスなどで入浴も可能になっているが、障害者のための入浴サービスは不十分である。今後は、非常時の支援から、介護保険や障害者自立支援法などの既存サービスの充実により、入浴の質を向上させていく必要があると考える。

#### 6. まとめ

東京都北区、荒川区、神奈川県横浜市、埼玉県を対象地域として、在宅障害者の入浴の実態について、以下のことがわかった。

- ・自宅の浴室で家族が入浴介助をおこなっている割合が高い。約半数はほぼ毎日入浴をしている。
- ・自宅を改造して浴室環境を改善している割合が高い。改造内容や使用している福祉用具は障害の程度（座位の状態）によって異なる。
- ・入浴の地域化のニーズは高い。施設入浴を週1-2回利用している場合でも、自宅の浴室で入浴介助をしている割合は8割以上である。
- ・ヘルパーや訪問入浴スタッフなどの他人が自宅に入ることへの抵抗感は強く、通所施設で入浴することを希望する親は多い。

個別の訪問調査では、物理的な環境整備で介助負担を軽減し、家庭のペースにあわせて入浴をおこなっている事例もあったが、介助者の腰痛などの事情により、訪問入浴、施設入浴、ヘルパーによる入浴を導入し、それらを組み合わせて制度を最大限に利用し、入浴回数を確保している事例があった。

また、施設入浴サービスの利用者への調査では、利用者は若年で重度の障害があり、また、ある程度の体格もあり、母の介助では負担が大きいことや親の年代も働き盛りで仕事と介助の両立が負担となっていること、また、浴室が0.75坪と狭いため、介助スペースが十分ではな

かったり、手足をぶつけるなど本人の移動に支障があることなどの問題が把握できた。そして、施設入浴サービスは、心身ともに疲労する親にとっての負担軽減やレスパイトになる一方、本人にとっては生活のメリハリとなり、社会参加、交流による楽しみを生み出していることもわかった。

また、被災地の調査では、特に下肢に重度の障害がある人は仮設住宅の浴室環境の未整備で入浴が困難になっていることがわかったが、改造には限界があるため、入浴行為を地域に拡大し、地域で入浴を支援していくという考え方が必要であることもわかった。この入浴の地域化という解決策は、本人の社会参加や交流にも効果をもたらすため、仮設団地で問題となっているコミュニティ形成の課題に対しても、意味を持つものと思われる。

親の働き方や生活スタイルが変化し、また、住宅や生活に対する要求も高まる中、ますます重度障害者も地域で暮らすことが当たり前となっていく今後に向けては、親の介助と仕事の両立や本人の社会参加や交流など生活の質の向上に対応できる施設入浴サービスの充実が求められると思われる。

#### <注>

1) 在宅障害者に対しておこなわれている入浴サービスには、①障害者自立支援法の介護給付による居宅介護（身体介護）及び重度訪問介護、②障害者自立支援法の介護給付による生活介護、③障害者自立支援法の地域生活支援事業による訪問入浴サービス、④障害者自立支援法の地域生活支援事業による施設入浴サービスなどがある。本研究で扱っている「ヘルパーによる自宅入浴」は上記①、「訪問入浴」は③、「施設入浴」は②、④を言い、このほかに障害者自立支援法の短期入所（ショートステイ）での入浴や施設独自におこなっている入浴もある。

#### <参考文献>

- 1) 野口祐子・阪東美智子・西村顕・橋本彼路子：障害児の育成と自立支援のための住環境整備に関する研究，平成19年度みずほ福祉助成財団社会福祉助成事業（研究助成）研究報告書，2008.11
- 2) 阪東美智子・野口祐子・鈴木晃：障害のある子どもの成育・子育てモデルの検討と住環境整備の介入のあり方に関する研究，平成21年度～平成23年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，2012.3
- 3) 厚生労働省：第3回応急仮設住宅の居住環境などに関するプロジェクトチームの資料について，2011.10  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001svlt.htm>
- 4) 「避難つらくて介護頼るしか」，朝日新聞，2012.3.4